

外国語（英語）科が考える学びの価値

上曾 恵理子 池野 那穂子 岩瀬 捷人 シィディッキ リュウ

1 英語科が考える学びの価値

Interaction opens the doors to our future!

2 学びの価値の設定理由

(1) 教科の特性から

英語はコミュニケーションのツールであるという、他の教科とは異なる側面をもつ。そのため「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」という言語ならではの4領域があり、中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年7月以下「解説」という。）ではその中の「話すこと」が[やり取り]と[発表]の二つに分けられている。

解説には、「授業では依然として文法・語彙の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないことや『やり取り』『即興性』を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある」と示されている。ここで示されたような言語活動を行うには、基礎的・基本的な知識や技能を習得し、それらを定着させた後、自己の思考を交えて表現する必要がある。そのため、習得するには時間も多くの過程も必要となるが、一度その素地を身に付けることができれば、目的や場面、状況を問わずにコミュニケーションを取ることができるようになる。

しかし実際にコミュニケーションをとる場面では、テストの問題のように分かりやすい最適解があるわけではないため、生徒は自分の答えは間違っているかもしれないという不安を感じやすい。会話活動中には、間違いを恐れて考えたり調べたりしているうちに即興でのやり取りに躓く場面が多く見られる。その際、最適解をもとめて学習用 ICT 端末で調べようとする生徒も少なくない。

即興のやりとりだけでなく、英語の学習においては学習用 ICT 端末の使用法には注意が必要である。現在、人工知能の技術及び汎用性の発達はめざましく、解答の条件を打ち込んで得られる文章のクオリティは日々向上している。利用に踏み切る企業や行政があり、その一方で学生の使用を禁ずる教育機関もニュースで報じられている。特に英語では、翻訳ソフトが手軽に使えて、英作文や和訳も容易に解決できてしまう。その手軽さゆえに使用する生徒は多いが、頼りすぎると自ら考える時間が少なくなり、学習したことも短期記憶同様に消えてしまい、身に付きにくい。

このような環境で、生徒が自分の学びに価値を感じるには、学びの過程で自己の努力や身に付けた力、自己の成長に気づき、自分自身のコミュニケーションをとる力に自信をもつことが必要ではないかと考える。学習中や学習後に学んだ英語を使ってできることに気付いたり、自分の成長を感じたりすることによって、自分の足りない力や身に付けたい力を感じ取らせたい。それを繰り返し、生徒が学びたいという意欲をもつことが学びの価値を継続的に感じられるのではないかと考える。

(2) 生徒の実態から

本校の生徒は理解力が高く、英語学習に積極的に取り組むことができる。知的好奇心が強く、分からないことは学びたい、知りたい、と考えてすぐに調べる姿勢ができています。自ら考えを表現することにも積極的な生徒が多い。

英語科では、「話すこと」の即興性を高めるために、第2学年ではペアやグループでのやりとり、第3学年では1分間スピーチを継続して行っている。特に第3学年の1分間スピーチでは1分間で用いた語数を数える「ワードカウント」を取り入れ、適切な表現でなかったとしても、発話することを促して、考えながら話すことに慣れるようにしている。また、スピーチの後は聞き手だった生徒が質問し、そのまま会話をする形式にし、即興でやり取りを練習する形をとった。令和4年度の3年生に2

月にとった英語科の授業における活動内容に関する記述式のアンケートによると、1分間スピーチは「事前に話す内容を知ることができずに大変だったが、話すことに慣れることができて良かった」「前より話せるようになった。」「言いたいことが分からないと言い換えることができるようになった。」、などの記述が見られた。しかし1分間に用いた語数に重きを置いた活動であったために、自分の話したい内容が英語で表現できないと、内容を省略してしまう場面がよく見られた。そのようなスピーチの後だと聞き手からの質問も浅い内容になり、表面上は上手く続いているように見えても、生徒たちは相互に話したいことや聞きたいことを伝え合えていない。生徒たちには目的や場面、状況に応じて身に付いた表現を使いこなせるようにし、汎用性を認識させたい。その過程で自分に身に付いたコミュニケーション力を認識する機会を十分にもち、自分に必要なことを自ら補って自己の表現力を向上しようとする姿勢を育てたい。

3 授業者が考える学びの価値を伝える工夫

(1) 「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」を伸ばす学習活動の工夫

生徒一人一人が自立して、自ら学びを深めようとするためには、学習の見通しをもてるようにすることが大切である。本校英語科では、各学年において単元の目標、評価規準、指導計画などが逆向き設計で示された英語ノートを作成し、各単元の導入時に生徒に配付している。この英語ノートを使うことにより、生徒達は最初に単元のガイダンスで実現すべき目標を共有し、授業の学習活動においてはその目標を意識しながら活動内容や自分の考えを記入し、単元終了時には学んだことの確認ができるようになっている。

パフォーマンステストは5領域それぞれを確認するだけでなく、「聞くこと」と「話すこと」、「聞くこと」と「書くこと」の力が双方とも必要とされるような、より実践的な内容になるような形で行い、特に「話すこと」のパフォーマンステストにおいては目的・場面・状況や必然性が感じられるように設定している。また、日々の学習活動がその練習となるよう内容を工夫し、生徒が意味のある学びとして日々の学習活動とパフォーマンステストのつながりや関連性を捉えられるようにしている。

(2) 生徒が自己の力を認識できる機会の充実

昨年度より、本校の生徒は学年の始めと後期において「自己紹介」の英文を書く活動を行っている。これは次年度以降も継続して書く予定である。生徒は以前に書いたものを見ながら、現在の自分もつ表現力を駆使して、自分のことを紹介する際に必要なことや最も伝えたいことを記述していく。その際、以前のもを見て意識しながら書くことで、ポートフォリオ効果を意図している。令和3年度の第3学年の生徒は、初回ではとにかく書けるだけのことを量で書く生徒が多かったが、卒業直前で書いたものはパラグラフィティングに近い形である程度まとまった内容を書くようになり、さらに、既習表現を使うように努める傾向が見られた。学習用 ICT 端末を利用し、話すことについてもこの活動をつなげたいと考えている。

1分間スピーチなどの会話活動においては、目標とする語数や具体的な目標を設定して到達意欲をもたせ、回数を重ねるごとに自分の成長が実感できるようにしている。

(3) 自分の力で考え、学び続けることのできる自律学習者を育成する学習活動の充実

生徒たちが即興で英語を話したり書いたりする力は日本語で行っているものに及ばないため、翻訳ソフトに頼ったり、質問してきたりすることが多い。しかし生徒が表現したいことは、未習語を除けば、パラフレーズし（意味内容を変えずに平易な表現に言い換え）たり、元の日本語を違う表現に変えたりすると自己で表現できるものである。そのため、学習用 ICT 端末の多用を避けるために、使う際のルールを設けている。また、まとまった内容を話す際は原稿を作らず、メモを見て話すように促している。メモは英語でも日本語でも可能としているが、最終的に”Think in Japanese, speak in English”から”Think and speak in English”へ移行させたい。

また、会話活動、書く活動はノーヒントで行うことを心掛け、生徒が自ら気づき、知りたいと思う機会を作るようにしている。「言いたかった日本語が英語では言えなかった表現」はその都度メモさせて、次回以降は違う表現で伝えるか、正しい表現を使うことができるように意識させたい。